

「それいじょうあおくなれない／さびしさに萎んで／濃くなる／風船の／青」

大嶋 碧月（石川県）

改行のたびに漢字が増えて表記上の色が濃くなっていく。こういう神経の遣い方は大事だと思います。伸縮と色の関係にポエジーを見いだしているところも優れています。

「インコは首をかしげることばかり／あいしてるかな／あいしてるかな……」

閉じ花（北海道）

「あいしてるかな、あいしてないかな」ではなく、「あいしてるかな」の一択であるところにあたたかなものが宿っています。首をかしげつつ、愛に疑念を持たないインコの尊さ。

「洗われぬ鉢として立つ／ぎんいろの／大きな種をくれるんでしょう」

石村 まい（兵庫県）

意味はわからないのですが、「くれるんでしょう」の無垢なすこみに圧倒されそうです。この勢いに負けないものを探したくなります。

「明るさが影を圧倒する夏に／西友の影を信じて歩く」

天野奏（埼玉県）

「西友」という一般性の影に、私たちそれぞれの固有性が潜んでいるのだと思いました。こんなに密度の高い影をよく見つけましたね。

「半夏生ざわさわ満ちる／日盛りの／人影にふとあやうい淀み」

川上 真央（東京都）

「人影」や「ふと」はこちらを呼ぶ合図かもしれません。夏は四季のなかでもっとも死者と近しくなる季節ですから、生きている人間同様、距離感にはチョット注意したいものです。

「外側のカトラリーから使われて／私の羽は最初に消えた」

小武頼子（京都府）

外側から内側への見えない矢印が、夢から現実への動きに還元されているように見え、興味ぶかいです。食がすすむほどに何かの輪郭のようなものが崩され、飛翔が諦められていく。現実感の手ごたえが言葉でなぞられているのでしょうか。

「目の前の道は／行き止まり／コクンと背が重くなる」

橙蒼（埼玉県）

さりげないのですが、「コクン」というオノマトペをここで遣うセンスに注目しました。すぐに忘れてしまうほどの日常のなかのごく僅かな失望が掬い上げられています。

「瞬きの度に他人に移る神」

青星ふみる（岩手県）

私たちは対面で言葉をかわすとき、微笑みあうとき、「神」の移し合いをしているのかもしれないですね。幸福なことに自分の瞬きすら自分のためだけのものではないのでしょうか。

「ぽっかりと／無人の夕方で息をする／雨のグラウンド」

森川 紬（福井県）

このくらい宇宙的な大きな目をもたなければ、孤独なグラウンドの土の呼吸は聴き取れないのだと改めて思いました。

「長すぎる呪文は首に纏うから／短く切って風に唱える」

古倉 風紗（広島県）

言葉は物体でもあるということを明示してくれた秀作です。

「整備士の足に話して秋の雲」

佐藤 大吾（大阪府）

顔が見えないことへの違和感のようなものが、「秋の雲」へと昇華されて消えていきます。真に突き合わせているものは顔ではなくて心なのだ、というおおらかさが心地よいです。

次回も楽しみにしています。どうぞいろいろな書き方に自由に挑戦してみてください。